

## ◆平成 28 年度 第 3 回（通算第 57 回） 蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2016 年 6 月 24 日（金）

場所：すずかけ台 J221 講義室

### 公務員ってどんな仕事？ 人生の選択肢として

ぬかた みきこ

額田 樹子（1982 社工）横浜市 都市整備局 地域まちづくり部長

「このことを知ったらショックでしょうね。市長は泣いちゃうかも…」と困惑気味の額田さん。出鼻をくじかれた格好の滑り出しだった。会場は 150 名を超える学生であふれていたが、横浜市長の名前を言える人がほとんどいなかったのだ。林文子といえば思い出す人も多いだろう。都立青山高校を卒業後、東洋レーヨン（現東レ）、松下電器産業（現パナソニック）を経て自動車会社に転じ、BMW や日産の役員を務めた後、2009 年に横浜市長になった。現在 2 期目だ。モノが売れない時代に高級車のトップセールスを続け、『失礼ながら、その売り方ではモノは売れません』（2005）という本を書いて、注目された人だ。他にも数冊の著書<sup>注 1</sup>がある。舛添前都知事のバッシング記事を読んで溜飲（りゅういん）を下げるより、林さんの本を読んでモチベーションを上げたいものだ。

時代劇めいた都知事の所業に続き、英国の EU 離脱ニュースが流れた直後のゼミだっただけに、行政に関する話題は偶然とはいえ実にタイムリーだった。横浜市は林市長（2009.8～）のもとで、共感と信頼の行政を目指している。額田さんは係長の時に、交通不便地域向けに「お出かけサポートバス」モデル事業を立ち上げ実証運行を開始したが、苦勞の甲斐（かい）なく、5 年であえなく廃止に追い込まれた。この時の教訓を生かして、その後、持続可能なサービスとして乗合タクシー等を活用した「地域交通サポート事業」を導入し地域住民に感謝されている。「地域にふさわしい交通サービスは地域の力を活かして実現すべきで、運行補助金を導入する仕組みでは、利用啓発が進まず収支改善は難しい」というのが額田さんたちの結論だ。公務員を目指す人は、肝に銘じておくべき事実だろう。“補助金”と中毒を引き起こす“薬物”との類似性が指摘されながらも、補助金行政があまり改善されないのはどうしてだろうかと考えさせら

れた。

額田さんからのもう一つのメッセージは、「横浜市の職員になりませんか」ということだった：「横浜市は、皆さんのように優秀な人材を求めています。今回の受講生は、バイオ系の学生が多いということなので、市役所はあまり関係ないと思うかも知れません。しかし、化学職などもありますので是非公務員としての道も考えてみてください。29 歳までは大卒枠、59 歳まで社会人枠があります。社会経験を積んだ後で、市役所もいいかなと思っただけでも受けて下さい。皆さんと一緒に、横浜の未来に向けて働いたらこんない嬉しいことはありません」。今の仕事に遣り甲斐（やりがい）を感じているからこそ後輩を勧誘できる。そんな額田さんの仕事ぶりを見てみることにしよう。

#### 額田さんの略歴

額田さんは東京で育ったが、大岡山は通学圏外だったので、寮生活を送った。卓球部員として旧体育館の 2 階にあった卓球場でよく汗を流した。社会工学科に進み、卒研では、石原舜介（1949 建築, 1924～1996）研究室に所属し、都市計画に関する研究を行った。1982 年に社会工学科を卒業し、横浜市役所に土木職として入り、港湾局を皮切りに、都市整備局・道路局・環境創造局・政策局など関連深い部署を行き来しながら仕事をしてきた。この間に、「道路の整備」や「高速道路の計画」及びそのために必要な「交通計画」や「環境アセスメント」に関わり、最近では「地域まちづくり」の指揮を執っている。

林市長が誕生した時（2009 年 8 月）、額田さんは政策局にいた。急遽「待機児童ゼロ施策」を立案し次年度予算に反映させることになった。その（待機児童ゼロプロジェクト）事務局を担当したのが額田さんだ。保育園を造る仕事は、それまで、“こども青少年局”

だけで進めてきていた。予算審議を考えると12月までには案を固めなければならない。それには従来の縦割り行政ではとても間に合わない。そこで、こども青少年局・区役所・建築局・財政局など関係しそうな部署のメンバーに加え、子育て中の職員も加えプロジェクトチームを作った。待機児童数で全国ワーストワンだった横浜市は、平成25年(2013)には、ゼロを達成し、マスコミでも話題になった。話題といえば、政策課の課長だった2014年には、大きなニュースになった「カジノ」<sup>(注2)</sup>の誘致準備を担当したが、一番印象に残っているのは次項で紹介する「地域交通サポート事業」だそう。

学生からこんな質問が出た：「額田さんは、女性で、お子さんがあって、しかも部長職でいらっしゃるの、女性から見ると憧れです。差し支えない範囲で、お子さんを持たれた時期や育児、さらには仕事に注力された時期などについて、教えていただけませんか」。額田さんには2人の子供があり、上は27歳だそう。出産直前に育児休暇制度が出来たので、(当初は予定していなかったが、せつなくなので)半年の育児休暇を取得後、仕事に復帰した。幸い子供が健康でいい子だったこと、夜8時まで預かってくれる保育園が見つかったこと、ママ友にも恵まれ夜8時に間に合わない時は電話で頼むと誰かが面倒を見てくれたこと、そして職場の同僚にも支えられ急に帰らなくてはなくなった時には仕事を快く代わって貰えたことなど、“運”に恵まれたとの自己分析だった。親は遠く離れたところに住んでいて頼るわけにいかず、周りからの救いの手は身に沁みたのだろう。周囲の協力は額田さんの人柄と上質な仕事の証だ。

## 失敗に学ぶ

### 持続可能な地域公共交通の実現

#### (1) 失敗に終わった“お出かけサポートバス”

マイカーの普及によってバス路線の廃止が続いている。少子化と過疎化もこれに拍車をかけている。交通空白地域をなくすために、地方自治体はコミュニティバスを運行して住民の福祉向上に努めているが、公益的な観点から、市町村が赤字補填をするのが一般的だ(しかし、どの市町村も台所は火の車)。

横浜市も西区の交通不便地域を解消すべく実証実験を始めることになった(2003)。これを担当したのが額田さんで、部下と二人で走り回った。地主さんに頭を下げてバス停を作らせて貰ったり、狭い道路の拡幅工事をしたり、車幅規制にかからないように幅2m未満(1.99m)のバスを特注したりと苦勞の連続だった。桜木町駅を始点とする巡回バスで、1周40分、1時間に3本の運行で2年半近く(2003.12~2006.3)実証試験を行ったが結果は芳<sup>(かんば)</sup>しくなかった。バスリース料(約1700万円)に運行経費(約2700万円)を合わせると年間4400万円かかるが、収入は約2500万円で、1900万円近い赤字となった。そこで、2007年度には、収支の改善を図るために、(i)無料だった生活保護者を通常料金(210円)、高齢者を半額(100円)とし、(ii)運行本数も1時間に2本に減らし、さらに(iii)広告収入の確保にも努めたが、利用者は収支均衡ラインの480人/日の約半数にとどまり、収支の改善はほとんど見られなかった。これでは安定的な継続運行は無理だ。“ハマちゃんバス”という愛称まで付けていただけに、お出かけサポートバス事業からの撤退は残念だったに違いない。便利になったと喜んでいた住民にとってはもっと大変だ。いくらモデル事業で実証試験だったといっても、一方的に中止はできない。住民に納得して貰う必要があるのだ。計画を練り上げ実行にこぎつけるまでは係長だった額田さんと部下の2人で何とかできたが、中止するときはそうはいかなかった。住民の方たちを訪ね、課長にも何度も何度も頭を下げて貰ったそう。「始める時よりも、やめる時の方が大変でした」という額田さんの眩<sup>(つぶや)</sup>きが心に響いた。

#### (2) 住民を受け身にしてはいけない—自助努力をいかに引き出すか

実証試験(お出かけサポートバス事業)が思わしくなかったため、額田さんたちは次の手を考えていた。上記モデル事業の打ち切りと同時に、「横浜の新しい交通政策への提言(2007.3)」をまとめ、すかさず次の一手を打ったのだ。額田樹子(当時道路局企画課交通計画担当課長)名で出された記者発表(2007.7.12)を見てみよう：

**地域交通サポート事業をスタートします**

“地域に適した交通手段の導入”を支援します！

坂道の多い横浜では、既存のバス路線がない地域などで、住民の方々によって小型バスなどの生活に密着した交通手段の導入に向けた取組が進められています。

「地域交通サポート事業」とは、このような地域主体の取組がスムーズに進むように、運行に至るまでの事業の立ち上げに対して支援を行う事業であり、通院・買い物・通勤・通学等、様々な目的の方が一緒に乗り合って移動できる公共交通サービスの実現を目指します。

“地域の交通手段を地域の力で実現していく！”という意識を持っていただくことによって、多くの方が利用し、将来にわたって安定した運行が行えることを目指します。

本格運行が実施されてからは、行政からは **財政支援を行いません**ので、運行経費は運賃や地域の資金（協賛金・自治会の負担金等）でまかなうことが前提となります。…

住民の思いを形にし、それを持続させる仕組みを作れば、住民は安心して住み続けることができる。公務員冥利に尽きる話だが、口で言うほど簡単ではない。額田さんたちは記者発表と同時に分り易いリーフレットを作り、「お住まいの地域で、こんな悩みごとがあったら、遠慮なくご相談ください」

(図1)と働きかけを始めた。具体例をあげれば、旭区の四季美台地区の住民で自治会活動を通して問題意識を共有していた人たちがグループを形成し、検討会を立ち上げてくれた。表1に示すように、それ以来63回もの打ち合わせ会を重ね、4年後(2012)に“路線型乗合タクシー”方式をまとめ実証実験にとりかかった。事業者は二重(ふたえ)交通(株)、車種は9人乗りのハイエースで、平日のみの9往復だ。運賃に関しては高齢者に対しても平等に負担を求めることにした。この試行をふまえ

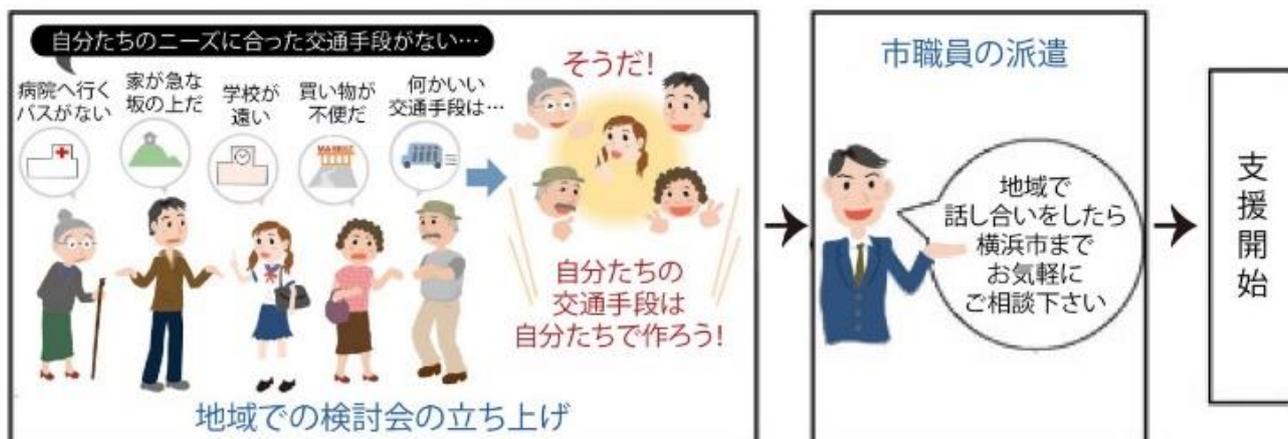


図1. 額田さんが担当課長として、「地域交通サポート事業」について、記者発表した時に使ったイラスト(2007.7.12)。

表1. 地域交通サポート事業の成功例

地区名	検討主体 (組織名称)	設立時期	打合せ 回数	地区の状況	取り組み内容 (検討ルート)	進捗状況
旭区 四季美台・今川町地区 すずかけ台 Campus 	旭中央地区 コミュニティバス等 検討委員会	2008.6.23	63回	二俣川駅、鶴ヶ峰駅から約1~2km  約2,000世帯 約6,000人	二俣川駅~四季美台地区~鶴ヶ峰駅付近	実証運行開始(2012.4.2) 7.31以降事業者が自主的に実証運行 ダイヤ等改正(2012.6) 本格運行開始(2013.4.1)

て、どこでも降りられるフリー降車の採用、ダイヤの改正、循環便への変更による増便などを行い、検討会を立ち上げてから5年後(2013)にようやく本格運行にこぎつけた。「四季めぐり号」という愛称で親しまれている。地元の人たちはニュースレター『“四季めぐり号”だより』を発行するとともに、公募作品の車内展覧会を実施するなど利用啓発に努めているそうだ。運行事業者も回数券の発行やドアステップの改良、AED (Automated external defibrillator) の設置など、積極的にサービス・安全性の向上に努めている。このように、住民・業者・横浜市の3者の信頼関係が築かれ、きめ細かな対応が出来ている点が成功の要因だろうとのことだった。旭区といえば、すずかけ台キャンパスがある緑区の南側に隣接している。休日に出かけて、「四季めぐり号」に乗ってみてはどうだろう。運賃は300円だ。同様の取り組みは他地区でも進められ、現在18地区で実現しているそうだ。

横浜市における持続可能な地域公共交通の実現に向けた取り組みの詳細については、額田さんの道路局時代の後輩が論文(注3)としてまとめているので参照されたい。

### “お役所仕事”は死語

昔は、役所での窓口対応に腹を立てることが多く、「お役所仕事」という言葉が生まれた。形式主義に流れ、不親切で非能率的な役所の仕事振りを非難する言葉でもあったが、額田さんの話を聞いて、「“お役所仕事”は変身を遂げた」と思った人も多いだろう。本来の公僕精神を取り戻し、褒め言葉になりつつあるとさえ言えそうだ。9時/5時の優雅で安定な生活を求めて役人になる人など、もはやいない。今回のゼミでは、最初に横浜の魅力(注4)と横浜市の未来に向けた取り組み(注5)が紹介された。市役所で働く人たちの仕事がよく理解できる名解説だったが、ここでは割愛し、概要を注の4&5に記すにとどめたい。

長時間労働が美德で、定時に帰る人は肩身の狭い思いをした時代もあったが、今は仕事も量より質で評価される。自分に合ったワーク・ライフ・バランス(WLB)でメリハリを付けて働くことが出来るわけで、理想的な環境だ。しかしよく考えると、

現在の延長線上のさほど難しくない(解が容易に出せる)仕事を上手にこなせば良かった時代から、新しい仕事やプロジェクトを自分で考え出し、種々の制約のもとでそれらを遂行しなければならない厳しい時代に入ったことを意味する。

今回のパネルディスカッションのテーマとして額田さんが取り上げたのはWLBだった。世の中が変わりつつあり、制度も充実しつつある。例えば横浜市の場合、子供が小学生になるまで時短(午後3:30終業)で働くことが出来る。5歳違いで2人目を生めば、10年間も時短を続けることができる計算になる。このケースでは、フルタイムで職場に戻った時には40歳近くになっていることになり、重要プロジェクトを任せてもらえる可能性は低くなる。WLBに関連する制度を賢く利用しつつ、一人の職業人として納得のいく生き方をして欲しいとのことだった。

### -----パネル ディスカッションのメモ-----

#### あなたにとって望ましいワークライフバランスは？

年齢とともにバランスを変化させることが出来るのが望ましい：仕事-家庭-再び仕事というように  
◆まだ実感はないが、メリハリのつく環境で仕事がしたい。自分の体のケアと家庭のケアなど臨機応変に対応できることを望む◆ブラックな仕事は嫌だ。毎週土曜日出社も避けたい。人生楽しいと思えるような社会人生活を期待している◆WLBの比率は、本音では3:7だが、実際には7:3でやるだろう。自分が現役を終えた時に、若い世代に、自分が何をしたかを語れるようにしたいからだ。格好悪い爺さんにはなりたくない◆リフレッシュして仕事のパフォーマンスを上げ、調子がいい時もリフレッシュして軌道を確認するのがよさそうだ◆これまでの議論には、仕事は嫌なものという前提があるようだが、そもそも仕事は嫌なものではないのでは？◆そうはいつでも、給料無しには働けないし、労働の対価としてお金を貰うことになる◆仕事が辛くなるようなブラック企業を選ばざるを得ない、あるいはそういう状況に陥ること自体が変なのでは？◆外国では早く帰って、家を造ったり修理したりでDo it yourselfを楽しんで

いるように見えるところもあるが、そこには年金制度が整っていないために、家をなるべく高く売って、老後に備える必要があるという背景もある

◆現役の時は子供の面倒はほとんどみななかったが、定年後は孫のおむつ替えもしている。2 世代住宅ならぬ 2 世代 WLB もいいかも知れない◆韓国では男も積極的に育児に参加するのが当たり前になっている。大事な自分の子供なのだから、日本人も考え方を直した方がいいのでは？

-----

(注1) 一生懸命って素敵なこと (草思社, 2006) ◆不思議なほど仕事がうまくいく「もう一言」の極意 (草思社, 2007) ◆会いたい人に会いに行きなさい (講談社, 2012) ◆共感する力—カリスマ経営者が横浜市長になってわかったこと (ワニブックス PLUS 新書, 2013) ◆しなやかな仕事術 (PHP 新書, 2013) ◆賢人の問題解決術 (共著, 幻冬舎, 2013) ◆部下を「お客さま」だと思えば 9 割の仕事はうまくいく (KADOKAWA/中経出版, 2014) ◆ちょっとした“気配り”で仕事も人間関係もラクになる! (秀和システム, 2015)

(注2) 統合観光型リゾート (IR, Integrated resort) : 政府はカジノを含めたショッピングモールやホテルを併設した IR を経済成長戦略の 1 つに位置付けており、これを受けて横浜市も名乗りを上げた。

(注3) 山形 珠実, 「横浜市における持続可能な地域公共交通の実現に向けた取組」, 国土交通省国土技術研究会論文集, 305-310, 2014。

(注4) 多様性が横浜の魅力 : 受講生の多くは、新入生ゼミ (1 泊 2 日のバスゼミ, 2012) で関根光雄 学部長 (現名誉教授) の講話『リベラルアーツ講座 : 横浜の文化と歴史を訪ねて』を思い出しながら、額田さんの話を聞いたことだろう。関根さんは横浜の郷土史家でもある。額田さんによれば、横浜のキーワードは港・歴史・文化・国際・スポーツ・観光・自然・農業・住宅・商業・工業だそう。農業は意外かもしれないが、コマツナやハマナシ (梨の地域ブランド) が有名らしい。最近では TV ドラマ「世界一難しい恋」の舞台にもなり、ランドマークタワー・横浜迎賓館・銭湯 仲乃湯・横浜ニューグランドホテルなどでロケが行われた。

三溪園もデートコースとしてお奨めようだ。額田さんは 山下公園近辺でよくジョギングをする。妹さんに誘われてマラソンも始めた。東京マラソンは毎回エントリーしているが、抽選に漏れて、なかなか走らせてもらえないようだ。

(注5) 横浜市の未来に向けた取り組み : 世界有数の理工系総合大学になることを目指してきた本学は、国立大学法人になってから、6 年単位の中期目標と中期計画を立て、その実現に向けて努力中だ。計画倒れに終わるのが常だった (子供の頃の) 夏休みの苦い経験を思い出しながら、市役所ではうまくいっているのだろうか と額田さんの説明に耳を傾けた。横浜市は 2025 年の大きな目標に向かって、中期 4 年計画を立案し、まちづくりを進めているようだ。その中心となるのが以下の 4 つの戦略だ : ① あらゆる人が力を発揮できるまちづくり—女性・子ども・若者・シニアのポテンシャルの発揮と健康づくりで元気なまち, ② 横浜の経済的発展とエネルギー循環都市の実現—活力ある経済が豊かさを生み、エネルギーが効率よく循環するまち, ③ 魅力と活力のあふれる都市の再生—世界中の人々や企業を惹きつけ、誰もが住みたい、住み続けたいと思えるまち, ④ 未来を支える強靱な都市づくり—横浜経済や市民生活を支える強靱な骨格と防災・減災機能を備えるまち。

上記 4 つの戦略関連のメモ : ① 日本では女性の社会参画度を年齢でプロットすると M 字形カーブになる。これは、子育て期の女性が専業主婦化するからだが、横浜市では全国平均よりも M 字の谷が深い。M 字形から、スウェーデンのように理想的な台形に近づけるべく努力中だそう。◆小1の壁 : 保育園時代は夜 8 時、9 時と延長保育があるのに対し、小学生を預かる学童クラブでは夜遅くまでの延長がないために、仕事と子育ての両立ができず離職やパートへの転職を迫られる。これを避けるために、横浜市では放課後キッズクラブの整備を進めている。♥本文中で触れた保育園造りに関連して、ショッキングな出来事が伝えられたので、横浜市の話ではないが記しておきたい。ニュースのタイトルはこうだ : 「世田谷保育園戦争」。待機児童数全国 1 位 (以前は横浜市がこの悪名高い地位にあった) の東京都世田谷区が保育園を増設するべく準備を進めていた。保育園が少なく住民からの要望も強い地区を優先して候補地を確定したが、いざ建設という段になって思いもしない反対に遭って立ち往生してしまったというのだ。そこは全国的にも有名な高級住宅地であり、社会的地位の高いシニア世代 (元官僚経験者や大企業の社長) が反対住民を率いている。閑静な環境と地価を破壊する保育園は迷惑施設以外の何物でもないのだろう。評論家的に偉そうなことを書いてしまったが、我が東工大も本館前のウッドデッキから

小さな子連れのお母さんたちを、静かな研究環境が壊れると言って追い出そうとしたことがあった；実際には許容派と歓迎派の声が強かったようで様子を見ることになり、今日に至っている。◆平均寿命と健康寿命の差が10歳近くもあることに驚いた。これを縮めないことには、医療・介護ニーズが増大し続け、社会が持たない。高齢者の仲間入りをした私も額田さんの勧めに従って万歩計を活用しなければと思った次第だが、この印象記の原稿書きに追われ、ここ数日は座ったままだ。印象記ではほんの少しか社会貢献しても、介護等で迷惑をかけるようになっては本末転倒だろうと思いつつも、今日も歩数不足だ。このままでは、Taxi driver ならぬ Desk driver か。②企業誘致に関しては、アップルの技術開発部門（綱島）、ユーグレナの研究所（ミドリムシからジェット燃料を作る会社、鶴見区）、資生堂のグローバルイノベーションセンター（研究所、みなとみらい21地区）、ダウ・ケミカルのダウ日本開発センター（神奈川県）などを呼び込むことに成功した。企業誘致に年間50億円も使っていると聞いて驚いたが、企業が成長してくれば、それを上回る税収が入るとのことだった。◆エネルギーが効率よく循環するスマートシティ構想に関しては、平成26年度第6回の本ゼミ（2014.11.17）でも紹介された（該当印象記のp.5右カラム）。◆観光事業との関連で出てきた MICE は Meeting, incentive travel, convention, exhibition の略。現在の国際会議場「パシフィコ横浜」は大繁盛で、「満員御礼」状態らしい。国際会議場を作ってはみたものの赤字に喘いでいる地方都市からみればうらやましい限りだろう。③臨海部の魅力向上プロジェクトに「にぎわいの軸」と名付けたのはさすがだ。プロジェクトの成否は愛称にかかっているといっても過言ではないからだ。横浜駅の再開発について、横浜育ちの学生からこんな質問が出た：「横浜駅は私が小さい頃から工事が続いており、地元では「横浜駅サクラダファミリア」と揶揄されています。工事はいつまで続くのでしょうか？」。横浜駅周辺は地盤が低いので、かさ上げをしながらの工事になる。更地ならば比較的簡単に嵩上げできるのだが、建物が林立する中での工事となると、ビルの改装のたびに、その区画の底上げをしていくしかないの、時間がかかるそうだ。ひょっとすると、スペインのサクラダファミリアが完成しても横浜駅の再開発は途上かもしれない。◆郊外部の再生・活性化については、横浜市では大きな問題にならないだろうと思っていたのだが、あにはからんや、64%もの人たちが（235万人）が郊外に住んでいるのだそうだ。④災害に強いまちづくりでは、公共施設の耐震化が98%済んでいると聞いて少し安心した。◆都市インフラの強化に関しては、額田さんが市役所に入所した当初に担当した横浜環状北線が「本年度中に完成予定です」と感慨深そうだった。

予算規模：横浜市の平成28年度の予算（一般会計）は約1兆5000億円；企業と比較するとトップのトヨタが27兆円で、80位前後のユニクロ・大成建設・清水建設と同じ程度の規模になる。これか

ら義務的経費（8500億円：職員の人件費・生活保護や医療費の援助 etc・借金の返済）を引くと、本来の行政事業に使えるのは半分以下となる。生活保護費等の福祉関連費用が膨れ、頭を抱えているとのことだった。



## 私たちが忘れない

本稿の仕上げをしていたときに、本学のOGがバングラデシュでテロ（2016.7.1夜）に巻き込まれ、志半ばで前途を絶たれてしまったことを知った。ご存じない方もおられると思うので、以下にまとめさせていただく。

バングラデシュのダッカでテロの犠牲となった人たちの中に27歳の女性も含まれていると伝えられました。その女性が同窓生の下平瑠衣（しもだいらい、2014社工MS）です。事件現場となったレストランで、たまたま、短期滞在者の打ち上げ会をしていて事件に巻き込まれました。下平さんは埼玉県の富士見市で育ち、県立蕨高校、芝浦工業大学建築学科を経て、本学の社会理工学研究科社会工学専攻で学びました。所属したのは土肥真人（どひまさと）研究室です。修士論文は「バンコクの小規模スラムを取り巻く空間・社会構造の研究—バーン・イーカン地区、バーン・バムルー地区を対象として—」（The spatial and social structure surrounding small slums in Bangkok — On the cases of Baan-Yiikan and Baan-Bamru sub districts）というタイトルでまとめ、2014年3月に修士課程を修了しました。本学に在学中の2012.7.1～2013.5.20の間、調査研究を兼ねて、タイのタンマサート大学に留学しています。卒業後は、途上国の街づくりを支援したいと、アルメックVPI社（交通・社会開発などのコンサルティング会社）に勤務、今回はJICAの依頼でバングラデシュでの交通渋滞緩和のための新システム導入に向けた事前調査に加わっていました。学生時代から国内外でボランティア活動に積極的に参加し、卒業研究では、福島県南会津町の山深い集落に通い、住民の暮らしを調査しています。いずれはこの蔵前ゼミの講師を務めて欲しい人でした

が、叶わなくなりました。本学在学中に図書館サポーターをしていた時の写真があります。東工大ハンドブックにも使われたものです。見覚えのある方も多いでしょう。常に前向きだった瑠衣さんの在りし日の姿を偲びつつ、ここに再掲します。



東京工業大学 博物館 資史料館部門 特命教授 広瀬茂久